慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランクリン抄
Sub Title	Franklin's vision of a political economy for America
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.365(137)- 379(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19820601-0137
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランクリン抄

渡辺　國廣

私のなかのフランクリン
土地について
だめなイギリス
働くということ
フランクリンのアメリカ

私のなかのフランクリン

今，なぜ，フランクリンか　フランクリンといえば，自伝により有名である。その彼に，経済学上，いくたの貢献があることは，早くから指摘されて来た。経済学者としてのフランクリンをめぐっては，国の内外で多くの論考が発表されている。それらのなかから，ここでは，1つの文献(1)を取り上げて見た。

フランクリンと私の出会いは，私が卒業習作のためフランクリンを選んだことに発する。今から30年以上も前のことであった。フランクリンの経済論作を軸に卒業習作をまとめ，そのまま大学に残った私が，学徒としての道を歩き出して以来，私の研究対象はフランクリンから離れたところにある。しかしフランクリンは私にとり忘れられない存在であり，彼の名を冠した文献を見れば，きっと立ちどまる私であった。そんなことで私は，今日までに，フランクリンに言及した文献を，幅広く読んでいる。読めば，メモする私の手もとに，メモは大量になった。今，取り上げた文献も，このメモの山に長く埋もれたままになっていた1つである。問われるとすれば，この1つだけを引っ張り出して来た理由。それをいえというのは，取り上げた文献がフランクリン学のなかで占める位置を明かせというたぐいだろう。フランクリンに長期親しんで来たとはいえ，フランクリン学徒でもない私にとり，これは任が重い。でも，取り上げた文献に私がかいま見たフランクリン像こそ，まともなフランクリン像だと断定できないほどの私ではない。であれば，たった今，私にできることが，取り上げた文献を，私のなかのフランクリン観に徴し，読み替えるぐらいのことであっても，

注(1)　Drew R. McCoy, "Benjamin Franklin's Vision of a Republican Political Economy for America," *William and Mary Quarterly*, 1978, 605–627.

私としては満足だった。事実，本稿の私は，その線を一歩も出ないという姿勢を堅持している。

ともあれ，フランクリンは，独立を迎えようとするアメリカで起った諸問題と取り組み，いくつか経済的主張をしていた。それらは，今に残る厖大な著述の各所に散らばっているだけに，フランクリン研究のための手引書は，各種，いくら数あってもいい。こんな気持から私は，本稿を問うている。本稿を介し伝わって来るのは，アメリカ建国に託するフランクリンの夢といったものだろうか。その夢を，彼が生きた時代の争点との関連で位置づけて見ることは，私のジャンルの経済史の仕事の立派な1つである。しかし経済史の学徒としての私の研究対象が，フランスというアメリカから遠いところにある今，探る手だてもない。

フランクリンに学ぶ　本稿は経済学史のジャンルで，存在価値を問われることになろう。それを覚悟の上の仕事でも，本稿により私は，外国文献から読み取った大意を伝えるという手法に終始してしまっている。フランクリン研究を前進させるため，こうした本稿がどれほどの意味を持つかは，フランクリン学について門外漢である私のきめかねるところ。本稿のフランクリンは，土地を暮しの基礎として大切にし，またなみの人たちの日々の暮しを大事がることしきり。こうしたフランクリンを，二流の経済論者と見て排除できないというのが，私の立場でもある。

私はつかれて，フランクリンにはいった。にもかかわらず，実を結ぶまでにいたらなかった。それだけに，いっときとはいえ，フランクリンにのめり込んだ私をいとおしむ気持が，私には強い。こうした私の気持から成った本稿だけに，本稿により私の名前がフランクリン学徒のなかにエントリーされるのは，私の願ってもないこと。しかし外国文献の紹介に徹した本稿に，私のそうした願いを託するのは，あつかましい限りというものだろう。本稿は，掲げた題により近々刊行される私の仕事の一部として用意されたもの。正式のエントリーは，その刊行まで待たねばなるまい。

繰り返すが，本稿は，私のオリジナルではない。そうした本稿にとり，まっとうな註といえば，本稿のため下敷きとして取り出した文献の一部始終だろう。だが，私は，これとは別種の註を，本稿に付している。その註たるや，フランクリンの作品の原名と，発表日を届けるだけのもの。本稿が手引書を目ざす以上，ふさわしい註ということであれば，この程度のものでいいとすら，私は断言するをはばからない。示した註は，フランクリンに深入りする確かな導きとなる筈。しかし深入りをすすめるといっても，本稿が伝える程度に大づかみ，それでいて狂いの小さいフランクリン像が，別の視点から構成されることが私の心からの願い。という時，私は学において精緻ばかり気づかう傾向に背を向けるということ。本稿が下敷きとして取り出した文献は，学に対する私のそうした姿勢にぴったりだったといえば，私がこの一編を選んだ理由のもう一端をいったことになろう。本稿を仕上げることにより私は，フランクリンを大多数のなかに取り戻すことができたと信じている。それをもっとも喜んでくれるのは大多数が喜ぶなら右顧左眄も辞さなかった当のフランクリン自身だったろう。

なお，フランクリンには，言葉の正しい意味での全集がない。目下，計画が進行中で，1959年以来，22冊，出ている。この計画[2]は，フランクリンの出生を示す1706年の記録に始まり，彼の作を年代順に並べ，1982年現在，1776年にかかったところ。彼の著述活動は，1776年以降，死の1790年まで続く。積み残された分は，今のところ，1956年覆刻の10巻ものの別の企画[3]によるほかない。

土地について

アメリカには，増加する人口が農民として自立できる広い土地があった

フランクリンは北アメリカにおける人口増加に関する分析により，著名である。植民地の人口がほぼ20年ごとに倍増するという彼の定則は，1751年の論文[4]のなかで，提示された。この論文は，ヨーロッパと北アメリカの人口に関する比較検討を含むと同時に，人口の増加を促進したり妨害したりする条件についての幅広い考察を含んでいた。フランクリンは人口が結婚数に比例して増加し，結婚数は家族を扶養する容易さに依存すると論じた。家族の扶養が容易なため決定的要因は，土地の有効な供給と，人口密度だった。定住者が充満するヨーロッパの国々では，快適な生活が困難なことから，結婚する勇気がそがれた。フランクリンによれば，土地を獲得できない者は，土地を所有する他の人のため，労働しなければならず，労働者が多い時，賃金は低いし，低い賃金によっては，家族の扶養が困難であり，この困難から多くの者は結婚を断念し，長く奉公人や独身を続ける。ひるがえって，土地がまだ豊富で安いアメリカでは，若い労働者でも盛大な農場を所有することが期待できるから，早い時期に結婚し，大家族の形成が可能だろう。このことから，人口密度の高いヨーロッパと，人口稀薄な北アメリカでは，人口増加率に劇的な違いが生じた。

広い土地がある限り，アメリカはいつまでも農業段階にとどまる

フランクリンの関心が人口密度に向かったことは，人口増加が推進力となって，社会発展が起るという彼の確信を反映するものだった。フランクリンによれば，国民の生業はその国の人口密度に依存する。土地が豊富で，定住のため有効な限り，独立で豊かな豊民が圧倒的多数を占めた農業段階を越える進歩はないだろう。社会の老齢化につれ，人口が土地の供給を圧迫し始めた時，多くの人々は生活の手段を，工業に求めざるを得ない。そうした人々は独立でも，自営でもなかった。彼らは主人のために働く従属的な賃金労働者だった。1760年の論文[5]によりフランクリンは，工業が貧困に基礎を置くと訴える。なぜなら，他人のため低賃金で働かなければならないか，餓死しなければならない土地のない貧し

注(2) Leonard W. Labaree *et. al.*, eds., *The Papers of Benjamin Franklin*, 1959–.
(3) Albert Henry Smyth, ed., *The Writings of Benjamin Franklin*, 1907.
(4) *Observations Concerning the Increase of Mankind and the Peopling of Countries*, 1751.
(5) *The Interest of Great Britain Considered with Regard to her Colonies and the Acquisitions of Canada and Guadaloupe*, 1760.

い人々が国内にいなければ，企業家は工業に乗り出すことができないからだ。事実，自分の労働で自分の家族を裕福に過させるだけの土地を持っているいかなる人も，工業者になったり，主人のため働いたりするほど貧しくはなかった。フランクリンの主張によれば，経済生活の型は，人間の数によるだろう。人口稀薄な森林国の住民の当然の生活手段は，狩猟。数が増すと，牧養。中程度の人口になれば，農業。最高の人口を抱えれば，工業である。人口稠密な国の圧倒的多数は生活のため，工業に頼らざるを得ず，でなければ，慈悲にすがって生き延びるか，死がなければならないかのいずれかだろう。

アメリカの社会が健全なのは，広い土地が提供するチャンスのおかげである

フランクリンはイギリスが人口過剰で，ひどく堕落した老いぼれ社会だと判定した。北アメリカにおけるイギリスの植民地と違って，イギリスは処女地に頼ることができない。イギリスの状況は，過剰人口を支えるため大規模工業が発展しなければならない定住者の充満する国の典型だった。フランクリンの眼に映じたイギリスは古く，定住者がいっぱいで，階級差が大きく，社会発展の進んだ段階に見られる不平等と従属が目立つ社会だった。

こうした見方の基礎にあるフランクリンの確信は，若い社会のアメリカが，稠密な人口を抱え，極端に不平等で，貧困や従属がはびこる社会発展の最終的な堕落した段階にまだ到着せず，急にも到着しないということ。フランクリンがアメリカにおける急速な人口増加に対し好感を寄せたのは，一見して奇妙のようだ。彼の楽天主義を説明できる唯一の根拠は，アメリカの人口が，無限な拡大のための可能性を持つという彼の確信だった。空処の供給が適切に続く限り，アメリカは発展のより高い，より不安定な段階に突入することはないとフランクリンは信じていた。若くて，健康的な社会の証明である人口の急速な増加は，若々しい繁栄を害する条件を作り出さないだろう。未耕で，開拓可能な広い森林は，増加するアメリカの人口のため，必要な場を準備し続けるに違いない。豊富な土地が提供するチャンスのおかげで，アメリカは不平等，従属，堕落が目立つ旧世界の悲劇を繰り返さない。

広い土地を迷惑がるようなアメリカでは，イギリスの轍を踏むこと必至

イギリスで植民地代表を勤めた1760年代に，フランクリンはフランス重農派の影響を受けた。重農派とフランクリンの出会いは，彼の経済理念を鋭利にし，またイギリスの植民政策についての彼の認識や，イギリスの経済学に対する彼の理解を形成する反重商的な視点を確立した。フランクリンが農業優先に突き進むため，重農派を必要としなかった。重商派が貿易や工業を重視したことに対する重農派の告発が刺激となって，フランクリンの考えはより体系的な仕上がりを示した。農業は富の唯一の源であり，経済に対する政治の介入は有害だとする重農派の主張を，フランクリンは迷いもなく採用した。さいわい，農業はアメリカ最大の産業でもあった。

重農派は，農村を犠牲にし，工業のなかでも，奢侈的な工業の生産を奨励する政治制度のもろさ

に驚いた。重農派によれば，かかる政治制度は人間のエネルギーを，大多数のための生活上の必要品の生産から，富裕なエリートによってだけ消費される軽薄でなくてもいいものの生産に向ける。政治手段により強制された流行や贅沢が生活に先行し，生活費は破壊的だった。人口は農村から流出し，土地を捨て，雑踏する都市に殺到した。都市でも農村でも，労働大衆が，贅沢で頽廃的な特権的エリートの生活を支えるため搾取される停滞した社会経済の特徴は，ひどい貧困，不平等，自然資源のみだらな浪費だった。局面打開のため重商派は，輸出超過が国富の形成につながるとの視点から，外国向けの工業生産という妄想に取りつかれた。国民的繁栄は労働階級の安い労働を，工業製品の形で外国に輸出することに起因すると見た重商派の主張から，フランクリンがとりわけ気にしたのは，イギリス労働階級のことだった。

だめなイギリス

人口圧のほか，イギリスをだめにした元凶のもう一つが，偏向政治

フランクリンはイギリス社会についてひどく否定的な見方を主張するようになった。彼の痛烈さは，土地の供給に対する人口圧の結果という以上に，イギリスがジレンマに追い込まれたという強い認識から生じた。政治がイギリス社会の病状を激化したとするのが，フランクリンの立場。人口増加の容赦ない圧迫により，社会は老化して行くが，しかし誤った経済原則を採用したり，特定グループや特殊な利益の要求に応じたりする重商政策によって，社会は衰退を早め，状態を悪化させよう。そうした傾向を，フランクリンはイギリスの政府と社会の双方に見る。フランクリンの眼にイギリスは，絶望的に堕落した国と映じた。

イギリスは輸出を有利に運ぶため，大多数に対し犠牲を強いている

フランクリンに従えば，イギリス経済学の特色は，輸出生産の奨励を国益視したことにあった。こうした種類の経済学が支持したのは，重商派と同じく，極端に低い賃金で働く貧しい労働者を大量にプールする稠密な人口だった。自明の如く，世界市場において成功裡に競争できる安い生産が可能なため，賃金は低く抑えられなければならない。労働階級の貧困とハードな労働は，国力と国富に対する保証のようなものだから，重商派は心情において，富の高度に不公平な分配を是認するものだった。18世紀の諺を持ち出せば，貧者の労働は富者の宝である。イギリスの働く貧民は，イギリスの社会上層により，柔順で，しばしば手に負えない道具とも，またシステマチックに組織され，そして搾取される経済資源とも見られた。財産のない貧民は，不完全な人間であり，政治的権利に対しほとんど資格のない人間だった。イギリス人口の大半を構成するこうした貧乏な卑劣漢は，法律の上でも，また事実においても，より高い状態に向上できず，早くから卑しい労働や厳しい耐乏に慣らされて来た。そうした人々のなかでも，救い難い怠け者や不良は，奴隷にしてしまうべきだとの声すら起るほどだ

った。貿易を有利に運ぶため，生きるだけの賃金と，非常に貧乏な労働力が前提だという重商派の主張に対しては，異論が続出した。しかしフランクリンは1768年の論文[6]のなかで，賃金を引き上げることにより労働者の貧しさを改善するいかなる法律も，より悪い結末を招来するだけだといった。重商派の標準的な議論むき出しの彼は，もしイギリスの工業製品があまりにも高ければ，外国で売れないだろうし，その分だけ仕事がなくなるだろうと書いた。仕事がなくなることは，イギリスにとり間違いなく困った事態だった。重商派の経済学は，古くて人口の多いイギリス社会にとり似つかわしいかも知れない。しかしフランクリンは，重商派が多くの働く人々とその家族の悲惨と落胆を助長したという現実を忘れなかった。

事実，1769年のフランクリン論文[7]が打ち出したのは，輸出のための工業によって富を得ることを強調するイギリスに対する否定的な見方だった。彼によれば，工業の利益は工業製品の形で食糧が，より容易に外国市場まで運べることにあった。また工業製品によって，商人はいとも簡単に外国人をだますことができる。彼は例として，レースを作っていない場所では，レースの価値を判断できる人が少なく，だから輸入商人は40シリングを要求して，たった20シリングのものを，30シリングにも売ることができるといい張った。農業こそ国富の唯一の合法的な源だとした重農派の主張を反映し，フランクリンは，このタイプの商業を，不正と断定する。国が富を獲得するには，3つの方法しかないようだ。第1は，戦争により，隣国を略奪するのである。これは，強奪である。第2は，商業による。これは，詐欺である。第3は，農業による。これは，誠実な唯一の方法である。農業により人間は，精いっぱいの勤勉に対する報酬として，土地に播いた種の真の増加分を受け取る。フランクリンにおいて，商業という語は，実際価値以上に工業を大事がる重商主義国イギリスを告発するためにだけあった。アメリカの商業のように，外国市場への農産物の輸出と固く結びついた商業であれば，詐欺というレッテルは正しくないとするのが，フランクリンのいい分だった。[8] フランクリンは随所で重農色濃い発言を繰り返す。[9] 彼の目ざす農業では，可能な限りの広い土地が穀物生産のため振り向けられている。

イギリスにおいて恵まれるのは体制側の少数だけ，取り残された大多数は，悲惨である

フランクリンが関心を向けたのは，輸出を有利に運ぶためイギリス民衆の安楽と安全を犠牲にした重商政策の破壊的な結末に対してだった。1771年に彼はアイルランド，スコットランド，イングランドの織物地帯を旅行し，ぎょっとするような事態を見た。フランクリンの眼に，イギリスの輸出は，

注(6) *On the Labouring Poor*, 1768.
(7) *Positions to be Examined Concerning National Wealth*, 1769.
(8) To Cadwalader Evans, Feb. 20, 1768.
(9) *Note Respecting Trade and Manufactures*, 1767; To Cadwalader Evans, Feb. 20, 1768; To Pierre Samuel du Pont de Nemours, July 28, 1768; To Lord Kames, Jan. 1, 1769; To Jean-Baptiste LeRoy, Jan. 31, 1769; To Lord Kames, Feb. 21, 1769; *Remarks on Agriculture and Manufacturing*, 1771.

みじめな住民の背を縮み上がらせ，腹を減らすものだった。[10] 事実，工業都市は不衛生の極。[11]

1772年の発言[12]によりフランクリンは，イギリス社会を特色づけた富の大量流出について論評し，またイギリス民衆の悲惨な状態を，ニューイングランド農民の自立で自営の状態と対比した。彼の期待は，ニューイングランド農民が長く現状にとどまるということだった。厭味たっぷりのフランクリンに従えば，ニューイングランド農民が貿易を望むなら，チャンスはあろう。ニューイングランド農民がアイルランド人口の4分の3なみに，年間，シャツなしで，ポテトとバターミルクで暮すなら，ニューイングランド商人は牛肉，バター，リンネルを輸出できる。ニューイングランド農民がスコットランドの大半の民衆のように，はだしで過すなら，ニューイングランド商人は大量の靴やストッキングを輸出できる。ニューイングランド農民がイングランドの紡績工や織布工のように，ぼろを着て満足なら，ニューイングランド商人は世界のあらゆる地点向けに，布や服地を生産できる。イギリス重商政策の結末に深い幻滅を感じたフランクリンであれば，簡単に中断もできず，文明の進歩を大々的に告発したり，原始未開を是認したりし続けた。イギリスでの見聞を踏まえたフランクリンなりの文明社会観に照して見て，彼としては，未開人が文明にはいり込んで来るよう忠告する気になれなかった。安楽な生活を送ったり楽しんだりという点で，文明人と比較し，インディアンは紳士であるというのが，彼の確信だった。大多数を未開状態に押し下げ，少数者が未開状態から引き上げられるのが，イギリスという文明社会の現実のようだ。[13]

イギリス社会についてフランクリンが感じた嫌悪は，イギリス政治の腐敗に対するフランクリンの軽蔑[14]とセットだった。1773年論文[15]にあるように，小作人から巻き上げたスコットランドの不在地主は，廷臣としてロンドンで贅沢に暮そうと，出費を調達するため急ぎ地代を，苛酷なまで引き上げた。フランクリンによれば，議会を構成するのは，宮廷のこうした無気力な手先だった。贅沢に気を奪われた者は，高潔な政治を約束できず，地位や年金のため廷臣となって，費用のかかる習慣を支えざるを得ない。イギリスは贅沢により衰弱し，借金に苦しみ，崩壊寸前。イギリスの国債や官僚制とついだった堕落の悲しい結末は，イギリスの国富が怠惰で非生産的な体制側の少数者のため，費消されたことだった。[16] その悪風は，北アメリカの植民地に対し汚染の脅威を与えた。

イギリスのいいなりでは，大商人ひとりがこえ，額に汗する弱者，いよいよ細る

フランクリンが心配したのは，堕落したイギリス政府が植民地住民を，イギリス奢侈品の無抵抗な消費者に仕上げることによって，植民地住民の富を枯渇させる恐れがあるということ。フランクリンがのろ

注(10) To Thomas Cushing, Jan. 13, 1772.
(11) To Thomas Percival, Oct. 15, 1773.
(12) To Joshua Babcock, Jan. 13, 1772.
(13) To Joseph Galloway, Feb. 6, 1772.
(14) *On Sinecures*, 1768.
(15) *On a Proposed Act to Prevent Emigration*, 1773.
(16) To Thomas Cushing, Oct. 10, 1774; To Joseph Galloway, Oct. 12, 1774.

い倒したのは，全世界のために製造したり貿易したりするという利己的な欲望であり，とりわけ，イギリスの新しい植民政策のなかに具体化されたアメリカ市場の独占という計画だった。[17] 事実，1760年代と1770年代の新しい植民地規制が意味したことは，工業製品の輸出が活力だった重商体制へ植民地を統合するための努力にほかならない。かかる尊大な決定の受益者が誰か，また犠牲者が誰かについて，フランクリンの考えに迷いはなかった。輸入品を扱う植民地の商人や店主を，フランクリンは，別荘や馬車を持ち，王侯なみに，民衆の額の汗で生活している人々と見る。[18] 植民地住民をむりにもイギリス経済の維持者にしようという計画をめぐって，1777年のフランクリン論文[19]が告発したように，イギリス政府の行動は，門の前を通る人々に体当りし，客として連れ込もうという気違いじみた店主の行動にも似ていた。政治的自由を保持するためばかりでなく，生産的で繁栄したアメリカの経済の基礎を確実にするためにも，古くて腐った国の汚染から植民地を隔離する必要があるということを，繰り返し発言するフランクリンだった。[20] イギリスに対する彼の痛罵は，執拗なほど。

どうでもいい余計なことにうつつを抜かすイギリスを見て，真面目で仕事好きの人なら，うんざりするはず

イギリス重商主義に対するフランクリンの批判の終着点は，アメリカの独立。独立が狙ったのは，イギリス王政の破棄だった。独立がめざしたのは，イギリスの経済体制の強い拒否だった。フランクリンはイギリス重商主義を，旧時代の悲劇を反映した経済学の体系と断定した。アメリカの独立は，旧世界を襲った腐敗と堕落がない社会の建設と維持のための闘争にほかならない。

こうした盛大な闘争を挫折させるため，アメリカの共和政府は不当な政治手段を介し，堕落した社会制度を押しつけないというのが，フランクリンの信ずるところ。アメリカにおける政府と社会の関係は，イギリス同様，互恵的であり，健康的な共和社会がアメリカでめざしたのは，共和国の経済と社会の高潔さを維持する自由な政府の構築だった。フリンクリンの政治観に徴した時，避けるべきは，イギリスの政府。真面目で仕事好きの人々を統治するのは，安上がりであり，古くて堕落した国で一般的だったように，もうかる役職も，いかなる閑職も，無駄な任用も必要としないとフランクリンは強調する。アメリカの資源は，堕落したイギリス政府が絶えず扇動する戦争といったとりわけ無駄で，不経済なプロジェクトに浪費されてはならない。独立国アメリカには，王が虚飾のため保持する浪費的で，不経済な艦隊や常備軍を用意する必要などないとの確信を，フランク

注(17) To Peter Collinson, Apr. 30, 1764.
(18) To Timothy Folger, Sep. 29, 1769.
(19) *Comparison of Great Britain and the United States in Regard to the Basis of Credit in the Two Countries*, 1777.
(20) To Joseph Galloway, Feb. 25, 1775; To Joseph Priestley, July 7, 1775; To Thomas Cushing, Oct. 10, 1774; To Samuel Cooper, Apr. 27, 1769; To Timothy Folger, Sep. 29, 1769.

リンは持つ。[21] イギリスが植民地に対し仕掛けた戦争は，堕落した政府がおこなう戦争のたぐいにほかならず，公共事業のため使わるべき自然資源や人的資源の痛ましい浪費だった。[22] フランクリンが1782年にした発言[23]に従えば，土地がたっぷりあり，政治が健全であるアメリカは，真の富を生産するため人々が自分の農場で真面目に働く労働の国であるのに対し，イギリスは人口圧と偏向政治のために，有毒な中傷者か，どうでもいい余分なものの生産者だった人々をあり余るほど抱えていた。これ以上にだめな国はないといい切るフランクリンだった。[24]

働くということ

アメリカ人が勤勉と節約の精神の持ち主であるのは，アメリカが農業社会であることの反映

アメリカの政府は，勤勉で節約な人々がいる社会においてだけ存立し得る。アメリカ存立の基礎が勤勉で節約な人々にあると見たフランクリンにとり，アメリカ人の間に勤勉と節約の精神を盛り上げることは，彼の生涯にわたる関心事だった。アメリカ人に勤勉と節約の精神を教え込むためエネルギーを傾けたフランクリンは，年老いた賢者が競売に集って来た人々に呼びかける説教風の話を作っている。[25] それは，勤勉と節約の精神をさとす言葉でいっぱいだった。

アメリカを確かなものにするためフランクリンは懸命になって，勤勉と節約の精神を盛り上げようとした。開拓したり開墾したりしなければならない厖大な量の森林がある限り，長くアメリカは勤勉と節約の精神を保持できると信ずるフランクリンだった。土地の有無が勤勉と節約の精神に影響を及ぼした。アメリカの森林がいったん開墾され，耕地になってしまえば，勤勉と節約の精神に対する決定的な刺激は消えてしまう。フランクリンは，彼が重視した勤勉や節約を農村かたぎと見ていた。フランクリンの計画は，勤勉で節約な人々を支持できる農業社会を確立することだった。農業社会の確立のためには，場所の拡大が先決。事実，場所の拡大は，フランクリン構想のキーだった。場所の拡大で必要になって来るのがまた，勤勉で節約な人々。1754年のフランクリン発言[26]に，勤勉で節約な人間の大集団を，オハイオ渓谷開拓のため投入できれば，すばらしいことだとある。勤勉で節約な人間に対するフランクリンの讃辞は尽きない。[27] 彼は勤勉と節約を，人間に欠かせない

注(21) To Charles de Weissenstein, July, 1, 1778; *Comparison of Great Britain and the United States*, 1777.

(22) To Sir Joseph Banks, July 27, 1783.

(23) *Information to Those Who Would Remove to America*, 1782.

(24) To Benjamin Vaughan, July 26, 1784.

(25) *Advice to a Young Tradesman, Written by an Old One*, 1748.

(26) *A Plan for Settling Two Western Colonies*, 1754.

(27) To George Whitefield, July 2. 1756; To Lord Kames, Oct. 21, 1761; *Poor Richard Iimproved*, 1765; To Joseph Galloway, Mar. 21, 1770; To the Philadelphia Merchants, July 9, 1769; *The Rise and Present State of Our Misunderstanding*, 1770; To Mrs. Sarah Bache, June 3, 1779.

能力とすら見る。

勤勉で節約なアメリカ人は資源の活用に意欲を燃やすから，アメリカ発展の礎

フランクリンが勤勉と節約の精神を重視したのは，個人や社会のモラルの維持のためだった。健全なアメリカ人は活動的で勤勉でなければならない。なぜなら，自己訓練を続ける真面目な職業人だけが，怠惰の避けられない結果だった精神上の堕落を撃退できるからだ。生産的な労働にいつも従事する忙しい人には，怠惰から生ずる無駄な時間というものがなかった。フランクリンが忠告するように，仕事で忙しい人には，誘惑がつけ込めない。[28] こうした考えを踏まえ，フランクリンは勤勉に絶えず働くことが，国民のモラルの強力な防腐剤だと指摘する。[29]

勤勉で節約なアメリカ人は借金と無縁だから，自由アメリカのシンボル

フランクリンが勤勉と節約の精神に重要な役割を託したのは，勤勉と節約の精神が人間の自立を保証するからだった。流行と贅沢だけを願う放縦な人は，借金に陥り，また借金に走った者は自由を他人に奪われるというのが，フランクリンの忠告だった。個人の自立は，アメリカの成功のため間違いなく必要。勤勉で節約な人間は決して金貸しの奴隷にならない。束縛をいさぎよしとせず，自由を守り，自立を維持することは，常識のすべてだった。[30] 1787年のフランクリン発言[31]に従えば，勤勉で節約な人だけが，真に自立可能である。怠け者，心得違いの者は他への従属を必要としよう。

勤勉で節約なアメリカ人は強い自制心の保持者だからアメリカの秩序の抑止力

フランクリンにより勤勉と節約の精神が最高位に置かれたのは，王政の廃止で暴力や恐怖といった抑止力が減退したアメリカにおいて，秩序と正義を維持するため必要な自制心，つまり共通の利益に対する私心のない献心が，勤勉と節約の精神なしには存在し得ないからだった。勤勉と節約の精神は伝統的に厳しい禁欲と，富に対する蔑視を要求する。事実，勤勉と節約の精神が強調したのは，懸命で無心な自己否定だった。

勤勉，節約を説くのは，実をいえば，アメリカ人が金持になってほしいから

勤勉は最大に重要だった。時間を浪費するな，有益なことに時間を使用せよ，不要な振舞を絶てというのが，フランクリンの自戒だった。フランクリンは勤勉を声高に誉めちぎった。運など取るに足りないと，彼はいう。アメリカ人はただ懸命に働くだけで，運など意に介しない。なぜなら，勤勉は幸運の母であり，勤勉によりあらゆるものが授かるからだった。職を持つ人は資産の保持者であり，また実入りが多くて高い地位の保持者だった。富への道は勤勉と節約の二語，つまり時と金を浪費せず，時と金を最大限に利用することにかかっていた。勤勉と節約を欠けば，何もできないが，勤勉と節約により，何もかも可能である。獲得できるすべてを獲得したり，節約できるすべてを節約したり

注(28) *Poor Richard Improved*, 1757.
(29) *Information to Those Who Would Remove to America*, 1782.
(30) *Poor Richard Improved*, 1758; To Timothy Folger, Sept. 29, 1769.
(31) To Messrs. the Abbés Chalut and Arnaud, Apr. 17, 1787.

する人は，誠実な努力の報いとして，金持になるだろう。勤勉と節約はフランクリンにとり，金もうけの手段だった。

フランクリンのアメリカ

アメリカを農業社会として維持するため，空いた土地がたっぷりあるというだけでは，不十分

フランクリンにとり望ましいアメリカは，堕落という悪を生む富や贅沢がない農業社会でなければならない。堕落に避け難い自立に対する権力の侵害は，富と不平等が強欲な行動や危険な従属を助長する進歩した社会できっと進行するプロセスだった。フランクリンは社会進歩にともない，貧困，不平等，従属，悲惨が増大すると見る。弱者と無産者が強者と特権者の搾取に服するのが当然なら，平等で自立の農民から成る社会は，堕落に対する矯正手段だった。フランクリンがアピールしたかったのは，農業社会には不平等も堕落もありそうもないということ。アメリカがめざす秩序は，人々が平等な富，地位，権力を持ち，何よりも個人として自立している農業社会でなければならない。

フランクリンが専念したのは，アメリカを農業社会として維持することだった。しかし空いた土地がたっぷりあるというだけで，成功は保証できない。勤勉な農民の国というフランクリンの理想を維持するため，外国市場が存分に活用できなければ，アメリカは，フランクリンがひどく恐れる野蛮で怠惰な状態に逆行するだろう。それを避けたければ，アメリカは農業や輸出貿易と並んで，工業を推進しようとしなければならない。かかる計画のためフランクリンが訴えたのは，怠惰で余剰な人口を雇用できる高度な工業や各種の奢侈工業のほか，多彩な家内工業を育成する必要があるということだった。しかし健全なアメリカのためにも，フランクリンは，高級品や高価な贅沢品を生産する大規模工業を受け入れることを嫌った。

農業社会であるアメリカの安定の上欠かせないのは，開かれた市場

フランクリンが大事にした自立精神は，農業色濃いものだった。しかし彼とて，外国商業に利益を感じない自立農民の閉鎖経済を考えていたわけではない。世界の他の部分との活気あふれる交流に，アメリカの将来を期待するフランクリンだった。外国商業が贅沢や堕落の原因であることは疑いない。しかし独立を契機として崩壊する重商体系の国際貿易に代って，広く開かれた商業体系が登場するだろうという確かな見通しに立ったフランクリンは，自由貿易の実現に向かい振い立った。早くも1760年代に，繰り返し彼は，自由貿易に言及している。[32] 独立した今，自由貿易はフランクリンのアメリカ構想にとり，絶対必要なものとなった。

注(32) To David Hume, Sept. 27, 1760; To Peter Collinson, Apr. 30, 1764; To Pierre Samuel du Pont de Nemours, July 28, 1768.

1783年のフランクリン発言[33]によれば，生活上の必要品や便宜品の相互交換である商業が，もっと自由で，もっと無制限なら，商業はもっと盛んで，商業国はすべてもっと幸福だった。自由貿易に寄せる期待を声高に叫ぶフランクリンにとり，自由貿易理論を，独立後のアメリカ商業に対し完全に適用するのは，まとを得ていよう。アメリカは生活上の必要品を輸出するから，貿易の相手国は，生活手段の増加という恩恵を得た。アメリカもまた，恩恵を得た。経済自立を誇らかに主張する大抵のアメリカ人が力説したがる以上に，アメリカの経済発展は外国貿易に依存していた。アメリカは余剰の農産物を輸出した。アメリカの恵まれた自然と，アメリカ農民のしたたかな勤勉ががっちり結びついた時，農産物の余剰は必至で，それを海外に売ることにより，富の蓄積は確実に進もう。アメリカがイギリスから勝ち得た独立は，自由貿易の新時代を告げ，とりわけアメリカの繁栄を告げると，フランクリンは固く信じていた。事実，フランクリンはしきりと，自由貿易に対し讃辞を呈する[34]。彼が1783年にした別の発言[35]によると，全世界の商業がアメリカのため開放されれば，アメリカの豊かな土壌は，アメリカ人の勤勉と組んで，独立戦争により受けた損害を間もなく修復し，アメリカ人のため繁栄を持ち込むだろう。アメリカの農産物に対し外国から無制限に需要があるのは，アメリカ農民の大きな恵みだった。しかしフランクリンによれば，アメリカの商業がイギリスの独占ではなく，全世界に対し開放されたことの好ましい他の結果は，アメリカ市場をめぐって諸外国の間で競争が起り，アメリカが買わなければならない輸入品の価格が低下したということだった。こうして自由貿易は，独立直前のアメリカを悩ませた貿易赤字の軽減を約束する[36]。

1729年という早い時期の論文[37]のなかで，フランクリンはアメリカの農業と外国貿易の危険な相互依存関係に気づいていた。貿易の不振はアメリカの土地の価値を引き下げ，農業の不振を惹き起した。自活のための農業は，未開人にとり大切だが，野心的で勤勉なアメリカ農民にとり，大切ではなかった。ミシシッピ川の航行をめぐり1780年代に起ったスペインとの論争に関連し，フランクリンが提唱したのは，アメリカ農民が余剰のため市場に接近できるというのが，基本的に重要だという議論だった。ミシシッピ川の安全な航行権を得るため支払うなら，どんな値段でもアメリカにとり高過ぎないとフランクリンは信じていた。スペイン人のことを，彼は，わが家の表玄関を売るよう頼みに来た隣人にもたとえている[38]。ミシシッピ川の航行権は西部の移住者が輸出のためおびただしい余剰を持つまで関係なかったとはいえ，その時点以前でも，航行制限は開拓の進行を妨害して

注(33) To comte de Vergennes, Mar. 16, 1783.

(34) To C. Van Der Oudermeulen, June 12, 1780; To John Adams, May 19, 1781; To Robert R. Livingston, July 22, 1783.

(35) To Mrs. Mary Hewson, Sept. 7, 1783.

(36) To Richard Price, Feb. 1, 1785; To M. Le Veillard, Mar. 16, 1786; To William Hunter, Nov. 24, 1786; To Dupont de Nemours, June 9, 1788; To Benjamin Vaughan, Nov. 2, 1789; To Alexander Small, Nov. 5, 1789.

(37) *A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency*, 1729.

(38) To John Jay, Oct. 2, 1780.

来た。販路がなければ，アメリカ農民は存在しない。いい農場とは，フランクリンによれば，収穫を市場にまで運び出すのが便利な農場のことだった。[39] 余剰が市場に向かって行くことは避けられない。余剰のための市場がなければ，西に移動した農民は無気力な生活に堕す恐れが多いだろう。フランクリンは立ちはだかるスペイン人に不快感を持った。[40]

自由貿易の新しい世界に，豊かな開かれた外国市場が期待できると見たフランクリンは，未耕の西部に対し農業生産を大々的に拡充することが可能だと確信するにいたった。西部開拓と自由貿易は，フランクリンが考えたアメリカ像の基礎だった。フランクリンの夢は際限なく自由な土地に望みを託した西部開拓と，アメリカ農民のため外国市場を保証する国際貿易の自由な展開に望みを託した自由貿易だった。アメリカの安定のためには，空いた場所と，開かれた市場が必要だとフランクリンは信じていた。そうした信念から，フランクリンは積極外交に加担することになった。

農業社会アメリカの工業は，健全な内需のためにだけあり，輸出生産を目的としない

フランクリンが構想した自由貿易の新しい世界では，アメリカが工業製品を大量に輸入し続けるだろう。フランクリンが期待したのは，フランスと他のヨーロッパ諸国がアメリカ貿易で競争し，それによってイギリス重商体制へのアメリカの結びつきが弱まればということであり，決して彼は独立を，アメリカが外国工業なしで間に合うという意味に解しなかった。イギリス工業製品の消費を縮少することが有利であると吹聴する時ですら彼は，アメリカが自国の必要を全面的に満たすだけ生産できなかったことを認めた。[41] しかしフランクリンは，アメリカの工業生産を，以前より拡大できるし，また拡大すべきであると信じていた。

フランクリンが強く望んだのは，アメリカが家内工業の生産を増加することだった。その利点は多い。農民は家族の自由な時間を生産的に利用しようと勤勉に励んだ。蓄積された貨幣は，農場の改善資金となった。アメリカの家内工業の産物はどれも重要な必要品ばかりで，軽薄な奢侈品などない。フランクリンによれば，この点でアメリカの工業は，外国市場向けの輸出生産であるイギリス工業の多くとまったく別物だった。[42] フランクリンのアメリカ工業構想が，もっとも単純な家内生産のタイプより先に出る時でも，彼は必要品の生産を強調し続けた。

アメリカ人口の著しい増加を予想した彼が確信したことは，間もなくイギリスがアメリカの全需要を供給できなくなるから，アメリカ人は節約と必要に導かれて，自国の工業に頼らざるを得ない

注(39) To Ferdinand Grand, Mar. 5, 1786.

(40) To Charles Pettit, Oct. 10, 1786.

(41) To Richard Jackson, Sept. 25, 1764; To Cadwalader Evans, Feb. 20, 1768; To comte de Vergennes, July 6, 1781; To prince des Deuxponts, June 14, 1783.

(42) To Richard Jackson, Sept. 25, 1764; To Cadwalader Evans, Feb. 20, 1768; *The State of the Trade with the Northern Colonies*, 1768; To Samuel Cooper, Apr. 27, 1769; To Cadwalader Evans, Sept. 7, 1769; To Timonthy Folger, Sept. 29, 1769; To Humphry Marshall, Mar. 18, 1770; *The Rise and Present State of Our Misunderstanding*, 1770; To Thomas Cushing, June 10, 1771; To M. Le Veillard, Oct. 24, 1788.

だろうこと。[43] フランクリンは何の抵抗もなくアメリカ工業構想のなかに，独立の職人や商人を加えた。彼らはアメリカ農民のため家，家具，道具を供給する必要で有用な人たちだった。しばしばこうした人たちは，一介の使用人として出発し，だが，真面目で勤勉な使用人はアメリカにおいて自分の仕事場の主人公になるというすばらしいチャンスを持っていた。有用で立派な市民は，ヨーロッパの大企業における従属した労働者と違い，技術と労働と道具を，自身でコントロールし，また農村のヨーマンのように，アメリカの柱だった自立精神を支える生活手段と密着していた。アメリカの職人は着実な需要がある必要品を生産するから，気まぐれや思いつきと無関係だった。土地のないみすぼらしい労働者を雇い，政府からの補助金や助成金に依存する大企業のためにだけ，アメリカは場を持たない。1782年の発言[44]のなかで，フランクリンは大工業計画を持ったヨーロッパの企業家が，アメリカに移住して来ることを，思いとどまらせた。アメリカでは，そうした大企業家が不必要であり，また歓迎されなかったというのだ。

自明の通り，フランクリンは，質素な必要品を生産する家内工業と，外国市場に対し多く輸出される高級品を生産する高度な資本制生産を，根本から，しばしば厳密に，区別していた。家内工業は，農民が家庭内で，最低の必要と趣向を満足させる質素な衣類や道具を生産していた農業段階に適切だった。一方，家庭の外部でおこなわれる高級品生産は，土地のない労働者が大量にいる老齢化し，爛熟し，贅沢がはびこる社会の象徴だった。自国内に若干種類の工業を持たずに存続できないのは，アメリカとて例外ではない。アメリカが工業を持たないという時，フランクリンは，遠くに売られる高級品や上等品を生産する工業のことだと見た。フランクリンにより，民衆の圧倒的多数のための衣類や家具が，自国の工業の産物であるのは，願わしいことだった。

贅沢にはやる心から，農業社会のアメリカにも，新規の工業が育って行こう

フランクリンはアメリカが限度以上に工業製品を輸入する傾向にあると見た。しかし彼は決して悲観しなかった。フランクリンはアメリカが輸入贅沢品にのめり込む危険が高いことを認める。しか彼はこうした危険に不安を感じなかった。フランクリンは贅沢ということに対し，複雑な思いを示した。彼は贅沢を，露骨に弁護する気になれなかった。でも彼は何度か，贅沢にもいくらかの効能があることをほのめかしている。贅沢を追い求めることが勤勉と仕事に対する有益な動機だとする議論に，フランクリンは同調する気配だった。勤勉を強く刺激することは，終始，彼をとらえた。なぜなら，人間の本性は着実に労働したり勤勉に生産したりすることを嫌うというのが，彼の信条だったからだ。心配や労働のない安楽な生活を願う人間の本性を克服することは，生産的で豊かなアメリカの建設をめざすフランクリンにとり，重大な問題だった。勤勉に対する最初の刺激は，フランクリンによれば，困窮と悲惨という危険であり，かかる刺激だけが人間を，未開生活のレベルから引き上

注(43) To Thomas Cushing, June 10, 1771; To Peter Collinson, Apr. 30, 1764.
(44) *Information to Those Who Would Remove to America*, 1782.

げる。社会の発展，好みの高級化につれ，多くのきざな欲望が生れた。[45] 贅沢品を持ちたいという欲望は，節度や責任がなければ，危険である。しかし贅沢欲を満足させたいという一心は，分別や思慮があれば，人間を無気力な日常から連れ出すため必要だった。いつか贅沢品を買ったり持ったりできるという期待こそ，労働と勤勉に対する大きな刺激ではなかったのか。フランクリンに従えば，そうした刺激がなく，人間が本性むき出しに，怠惰と無為に過すならば，贅沢により浪費した以上には生産できないだろう。フランクリンは贅沢人間を矯正する策がないという。彼には，大国アメリカなら矯正できるとも，贅沢の害がいわれているように大きいともいい切る自信がなかった。[46]

贅沢に深入りすることを，フランクリンは途轍もない無駄と見ない。贅沢を生産的労働に対する刺激剤と考え，多少の贅沢を呼びかけるフランクリンだった。[47] 贅沢にはやる心から，新規の工業が育って行くとすら断言する彼である。[48] フランクリンはしばしば節約を，けちと同列に置いた。であれば，贅沢を見るフランクリンに，ためらいがあったのは事実だろう。

（経済学部教授）

注 (45) To Peter Collinson, May 9, 1753; *On the Labouring Poor*, 1768.
(46) To Benjamin Vaughan, July 26, 1784; *The Internal State of America*, 1786.
(47) To Vaughan, July 26, 1784.
(48) To Samuel Cooper, Oct. 27, 1779; To Madame Brillon, Nov. 10, 1779.